あいな人 File_44
いちのせきを愛する人

地球緑化センター第23期緑のふるさと協力隊員

浅田 真佑さん

Asada Mayu　22　舞川

未知の世界だった農村生活 舞川での体験が道を決めた

浅田さんは、舞川5区で活動している第23期緑のふるさと協力隊員。昨年4月から、同区を中心に農業体験や地域づくり活動を行っています。

小学校の教師を目指して故郷の石川県から上京。大学で専攻していた美術教育がきっかけで、海外の教育に興味を持ちました。これまでオランダ、フィリピンやインドなど7カ国の教育現場を訪問。その先々で、自分の国の文化や良さを伝えられずに歯がゆい思いをしたといいます。そんな矢先に知った同隊員の募集。「もっと自分の国を知りたい」という一心で、入隊を決意しました。

舞川14区の民家を借りて、初めての農村生活がスタート。農作業の手伝いや地域行事への参加など、精力的に地域を回りました。「当初は方言が分からず、苦労しました」と懐かしみます。代かき、田植え、稲刈り、リンゴの収穫や和牛の世話。さまざまな農作業を体験する中で、徐々に地元の人たちとの交流が増えていきました。

地域に伝わる「蓬田神楽」の演舞にも積極的に挑戦。「地元の人たちが愛している神楽。伝統文化にじかに触れるいい機会でした」と振り返ります。

自身が地域に溶け込むことで「自分と地域だけではなく、地元の人たち同士の絆も強くなってくれれば」と願います。舞川での1年は、人との縁を感じた1年でもありました。

隊員の任期は3月15日まで。4月からは東京の大学に戻り、勉強を再開します。理想の教師像は「子供たちが興味のあることに自主的に進んでいけるようアドバイスできる先生」。そんな教師になるために「自分がいろいろな引き出しを持っていなければ」と目を輝かせます。

舞川での体験が、浅田さんの目指すべき道を確かなものに変えてくれました。地域の人たちへの感謝を胸に、浅田さんは夢へ向かって歩みを進めていきます。

Profile

1994年石川県小松市生まれ。地元の高校を卒業後、上京。教師を目指し、大学では美術教育を専攻。外国の教育にも興味を持ち、現在まで7カ国の教育現場を訪れた。大学を1年間休学し、昨年4月から緑のふるさと協力隊員として舞川へ。農作業や地域づくり活動など幅広く活躍

1657（明暦3）年の江戸の大火を受け、翌年から火防祈願として始まったといわれる祭り

COVER STORY

天下の奇祭 大東大原水かけ祭りが県無形民俗文化財に指定へ

359回目となる大東大原水かけ祭りは2月11日、大東町大原商店街などで開かれ、282人の裸男が冷水を浴びながら目抜き通りを駆け抜けました。

水かけは、午後3時に一斉にスタート。沿道からはおけやバケツで清め水が勢いよくかけられ、祭りは最高潮に達しました。

2月10日の県文化財保護審議会では、同祭りを県無形民俗文化財として指定するよう答申されました。鈴木功同祭り保存会長は「祭りのすばらしさが認められ光栄。天下の奇祭を全国に発信していきたい」と話しました。

《特集》一関の「ふるさと納税」

応援で創る未来

Special Feature: "Furusato Nozei" makes the future.

都市部から地方へ税金を還元するために平成20年度から始まった「ふるさと納税」。ふるさとや自分の好きな自治体に寄付をすることで、所得税や市・県民税の控除を受けることができる制度です。

東日本大震災で大きく注目された同制度。27年度には確定申告が不要な「ワンストップ特例制度」の創設や控除上限額の引き上げが行われました。マスコミなどにも取り上げられ、寄付を行う人は大幅に増えました。

制度が浸透する一方で、自治体間の「返礼品競争」は過熱。金券類や家電製品など、豪華すぎる返礼品に対しては、国が見直しを求めています。大切なことは、ふるさとを応援してくれた人に深く感謝すること。そして、寄付金を地域の未来のために役立てることではないでしょうか。

今号では、感謝の気持ちを込めた本市の返礼品や、寄付金で市が行った地域の未来を創る事業を紹介。ふるさと納税の本来の目的について考えます。